内田樹とマルクス

◎「内田樹」その思想

内田の思想的立場は保守系リベラルあるいは中道右派と言いうるもので。
憲法 9 条問題に関しては護憲派であり、共著で『九条どうでしょう？』という本を発表して独自の護憲論を展開したこともあります。
またネット右翼や『諸君!』『正論』などの右翼誌に対しても一貫して批判的であり。
護憲派であることから左派と看做されることもあるが、初期の著作より一貫して、自身の経験とレヴィナスの思想をもとにマルクス主義批判、学生運動批判、フェミニズム批判を行なっており、また労働問題では保守的な論を展開していることから、単純に左派と見ることは難しい様です。

◎なぜ左翼は　news.livedoor.com › 2017/01/15

なぜ、日本のリベラルや左翼は決定的な国民的エネルギーを喚起する力を持ち得ないのかというのは、久しく日本の政治思想上の課題だった。

それは畢竟するに、「民の原像」をつかみえていないこと、「死者の国」に踏み込みえないことに尽くされるだろう。「大衆の原像」という言葉は吉本隆明の鍵概念だから、渡辺もそれは念頭にあるはずである。
だが、「死者の国」に軸足を置くことが革命的エトスにとって死活的に重要だという実感を日本の左翼知識人はこれまでたぶん持ったことがない。
彼らにとって政治革命はあくまで「よりよき世界を創造する。権力によって不当に奪われた資源を奪還して（少しでも暮し向きをよくする）」という未来志向の実践的・功利的な運動にとどまる。
だから、横死した死者たちの魂を鎮めるための儀礼にはあまり手間暇を割かない。
日本の（だけでなく、世界どこでもそうだけれど）、リベラル・左翼・知識人がなかなか決定的な政治的エネルギーの結集軸たりえないのは「死者からの負託」ということの意味を重くとらないからである。僕はそう感じる。

世界中でリベラル・左翼・知識人が敗色濃厚なのは、掲げる政策が合理的で政治的に正しければ人々は必ずや彼らを支持し、信頼するはずだ（支持しないのは、無知だからだ、あるいはプロパガンダによって目を曇らされているからだ）という前提が間違っているからである。
政策的整合性を基準にして人々の政治的エネルギーは運動しているのではない。
政治的エネルギーの源泉は「死者たちの国」にある。
リベラル・左翼・知識人は「死者はきちんと葬式を出せばそれで片がつく」と思っている。いつまでも死人に仕事をさせるのはたぶん礼儀にはずれると思っているのだ。
極右の政治家たちはその点ではブラック企業の経営者のように仮借がない。「死者はいつまでも利用可能である」ということを政治技術として知っている。
それだけの違いである。けれども、その違いが決定的になることもある。

安倍晋三は今の日本の現役政治家の中で「死者を背負っている」という点では抜きん出た存在である。
彼はたしかに岸信介という生々しい死者を肩に担いでいる。祖父のし残した仕事を成し遂げるというような「個人的動機」で政治をするなんてけしからんと言う人がいるが、それは話の筋目が逆である。
今の日本の政治家の中で「死者に負託された仕事をしている」ことに自覚的なのは安倍晋三くらいである。だから、その政策のほとんどに対して国民は不同意であるにもかかわらず、彼の政治的「力」に対しては高い評価を与えているのである。
ただし、安倍にも限界がある。それは彼が同志でも朋友でもなく、「自分の血縁者だけを

選択的に死者として背負っている」点にある。
これに対して「すべての死者を背負う」という霊的スタンスを取っているのが天皇陛下である。
首相はその点について「天皇に勝てない」ということを知っている。
だから、天皇の政治的影響力を無化することにこれほど懸命なのである。
現代日本の政治の本質的なバトルは「ある種の死者の負託を背負う首相」と「すべての死者の負託を背負う陛下」の間の「霊的レベル」で展開している。

◎若者よ　マルクスを読もう

・共産党宣言を書いた時 1848 年、※マルクスは 29 歳、エンゲルスは 27 歳だった。
・プロレタリア…ドイツ語で「自分の労働力を打って生活する賃金労働者」.古代ローマの最下層階級の人々(政治上の権利もなく、兵役の義務もなく、子ども=prole を生むだけが仕事の無産者)のことでした。…マルクス･エンゲルスが「労働者」という中立的な擁護を採らず(たぶんふつうのドイツ人はその意味を知らない)､歴史的な用語からあえて「プロレタリア」という言葉を選び出したのは。「プロレタリア」に固有の含意を際立たせるためだとボクは思います。

【Wiki】プロレタリアート（ドイツ語: Proletariat）とは、資本主義社会における賃金労働者階級のこと。無産階級とも。個々の賃金労働者はプロレタリアと呼ばれる。雇用する側の資本家階級を指すブルジョワジーと対になった概念で、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスが『共産党宣言』で使った例によって広く普及した。

☆「ローマではそのような無産市民をプロレタリアと言った。もともと、民会の中で、騎士や重装歩兵などの武装を出来ない最下層の市民を、子ども（プローレス）しか持たない人々、という意味でプロレタリーと言っていたことによる。つまり「子どもしか財産のない人」という意味であった（子どもさえいない人は何と言われたのか？それはわからない)。彼らは無産者であっても「市民」であったので、投票権などの諸権利は認められていた」

※土地などの財産を持たない貧困層。古代ローマでは都市国家から地中海全域に領域を拡大する戦争が続き、その結果ら大土地所有制と奴隷制が広がって貧富の格差が拡大し、市民層の中に土地を無くして没落する人々が現れれてきた。図式化すれば、前２世紀前半から均質な市民階級が富裕な新貴族（騎士）と無産市民への階層分化した、とまとめることが出来る。ローマではそのような無産市民をプロレタリアと言った。もともと、民会の中で、騎士や重装歩兵などの武装を出来ない最下層の市民を、子ども（プローレス）しか持たない人々、という意味でプロレタリーと言っていたことによる。つまり「子どもしか財産のない人」という意味であった（子どもさえいない人は何と言われたのか？それはわからない)。彼らは無産者であっても「市民」であったので、投票権などの諸権利は認められていた

・マルクス 1818 年 5 月 5 日生まれ。

・マルクス主義以前のマルクス『ユダヤ人問題に寄せて』　　※マルクス 25 歳

『究極の意味におけるユダヤ人の解放は、ユダヤ教からの人間の解放である』『ユダヤ人の社会的解放は、ユダヤ教からの社会の解放である』→ユダヤ教をその純粋の表現とする「市民社会」からの人間の解放を必要とする(石川)

※内田「ユダヤ人問題は 2000 年の歴史を持つ社会問題で、今でも解決できていない」「マルクスは、ユダヤ人こそ自己利益の追求をあらゆることに優先させる『市民』のもっとも際だったあり方だと見なした」

・『あくどい商売からの、そして貨幣からの解放が、したがって実際の現実的なユダヤ教からの解放が､現代の自己解放だということになろう』…彼自身がユダヤ教のラビ(律法学者）の息子。

・ユダヤ人たちは、中世以来の差別で土地所有が許されていなかった。農業や製造業を営むことも…金融業者がほとんどユダヤ人であったのは、伝統的にキリスト教が利息を取ることを禁止していたから。

アメリカでもユダヤ人移民たちは、既存の業界の「隙間」(ニッチ)で生きるしかなかった。銀行業、ジャーナリズム、ショービジネスをユダヤ人が「支配」することになったのは、その仕事そのものを彼らが作り出したからです(自分で新しい業種を作り出す以外に生計を立てる道がなかったから)。

『市民社会はそれ自身の内臓から、たえずユダヤ人を生み出すのだ』『ユダヤ人の幻想的な国籍は、商人の、一般に金銭的人間の国籍である』

・マルクスはユダヤ人という語を「自己利益の追求を最優先するキリスト教徒」にも適用している。

※日本の在日朝鮮・韓国人の職業差別…焼き肉店、パチンコ店、(水商売、金融関係)

※ユダヤ人(Wiki)ユダヤ教の信者(宗教集団)、あるいはユダヤ人を親に持つ者(血統)によって構成される宗教的民族集団である。 ムスリムやクリスチャンと同じで、ユダヤ人という人種・血統的民族が有る訳では無い。ヨーロッパでは 19 世紀中頃まで主として前者の捉え方がなされていたが、近代的国民国家が成立してからは後者の捉え方が広まった。ハラーハー(ユダヤ法)では、ユダヤ人の母親から生まれた者、あるいは正式な手続きを経てユダヤ教に入信した者がユダヤ人であると規定されている。

2010 年現在の調査では、全世界に 1340 万を超えるユダヤ人が存在する。民族独自の国家としてイスラエルがあるほか、各国に移民が生活している。ヘブライ人やセム人と表記されることもある。

・近代反ユダヤ主義… 19 世紀末、エドワール・ドリュモン(仏ジャーナリスト)が完成させた。「拝金主義者」「利己主義者」「コスモポリタン」的傾向をまとめて「ユダヤ人」と呼んだ。 →ナチスによる「ホロコースト」に至る理論的基礎を築いた。

※ヨーロッパ左翼の(現代に至るまでの)ユダヤ人問題を論じる時の「ワキの甘さ」は、残念ながら、マルクスの「ユダヤ人問題によせて」が一因となっていると思う。

・マルクスは卓越した思想家だが、その全ての主張が正しいわけではない。

(石川の反論)「①ユダヤ人を金にきたないとののしる人間がいるが、②本当にそのことを問題にするのであれば、金にきたない人間を生む今日の『市民社会』を改革するというところまで話を進めるべきではないかと、こう言いたいのだと思います。」

・マルクス主義以前のマルクス『経済学・哲学草稿』…労働の疎外」(あるいは人間の疎外)

人間(労働者)の労働が本来持つはずの豊かな内容が、私的所有のもとでは失われている(石川まとめ) ※マルクス 26 歳の作品

a「労働生産物が、ひとつの疎外な存在となってしまうこと」…資本家のものになる。

b「労働が労働者にとって外的なものになる」…労働が自分の喜びではなく、資本の指揮による強制の下での苦痛になる

c「類的存在としての生活が個人的生存の手段とされること」

d「人間からの人間の疎外が生まれること」…人と人との関係が、人間本来の共同的あり方を失ってしまうこと。

・倫理性の高さ「彼らを疎外された労働から解放するのは私たちの仕事だ」と主張。

・類的存在をめざして変わる「(社会制度、法律を変えても、非人道的好意を厳しく罰しても、自己利益の追求が本音である限り、この社会はアンフェアであることを止められない)人間そのものが変わらなければ世の中は良くならない」

・マルクス主義者のマルクス(史的唯物論への到達)『ドイツ・イデオロギー』

・マルクス 28 歳

・共産主義は現実的運動「共産主義は、我々にとって作り出されるべき状態、現実が従わなければならない理想ではない。我々が共産主義と呼ぶのは、現在の状態を廃棄する現実的運動である。この運動の諸条件は、いま現存する前提から生じる。」

◎若者よ　マルクスを読もうⅡ 蘇るマルクス

※フランスにおける階級闘争(1948 年革命)／ルイ・ボナパルトのブリューメル 18 日(1948-51 年)　※マルクス 30 歳

・マルキストとマルクシアン…「マルクスの思想をマルクスの用語を使って語る人」と「マルクスの思想をマルクスの用語ではなく、自分の言葉を使って語る人」
・資本主義の全般的危機論…資本主義は放っておけば死滅する？この主張は、1928 年のコミンテルン第 6 回大会で採択された「コミンテルン綱領」のなかで最初に提唱された。その後、スターリンは、第二次世界大戦の時代を踏まえて、資本主義は全般的危機の第二段階へ進んだ、と述べた。
さらに 1960 年 81 か国共産党・労働者党国際会議「声明」(モスクワ声明) は、(1)キューバ革命やベトナム人民の勝利…全般的危機は第三段階に入ったと指摘した。
・類的存在論…孔子の「仁」に共通する「(未熟な)人間がそれをめざさなければならないもの」「まだ存在したことがないもの」。

◎司馬遷…中国前漢時代の歴史家、『史記』の著者。周代の記録係である司馬氏の子孫。『漢書』では、司馬遷処罰(宮刑)の背景には執筆中の『史記』にて「景帝本紀」を記したが、その内容が父・景帝を否定的に評していた事を知った武帝(7 代)が怒って削除させたと言い、これに李陵の件が重なって厳罰が課せられたという。しかしこの説には確証は無い　太史令の官職…天文・暦法や祭祀と国家の文書の起草や典籍・歴史を司った。
牢獄に繋がれてから 4 年後の太始元年（前 96 年）6 月、大赦によって司馬遷は釈放
『史記』は。「本紀」12 巻、「表」10 巻、「書」8 巻、「世家」30 巻、「列伝」70 巻から成る紀伝体の歴史書で、叙述範囲は伝説上の五帝の一人黄帝から前漢の武帝までである。
日本でも古くから読まれており、元号の出典として 12 回採用されている
※「平成」:【史記】から「内平外成」、および【書経】から「地平天成」
「平成」の名前の由来は、『史記』五帝本紀の「内平外成（内平かに外成る)」、『書経(偽古文尚書)』大禹謨の「地平天成（地平かに天成る)」からで「国の内外、天地とも平和が達成される」という意味である

・ディクタツゥーラ(執権)…
※①(日本共産党)1973 年に開かれた第 12 回党大会では、綱領の上記の箇所の「プロレタリアート独裁」は「プロレタリアート執権」に変更された。
次の第 13 回臨時党大会（1976 年）では、この「プロレタリアート執権」という語句自体をなくすことになった。
「プロレタリアート執権」という用語が、科学的社会主義の理論のうえで「労働者階級の権力」と同意義である以上、特別の説明をしなければ、一般に理解されない用語をあえて残しておく必要がないこと。
第 13 回臨時党大会で、「マルクス・レーニン主義」の語も綱領から消えたが、これも「科学的社会主義」の語に改められただけである
2004 年に開かれた第 23 回党大会では、さらに綱領は大幅に改定され、「労働者階級の権力」の語が消えた。代わって、「社会主義をめざす権力」の語が登場した。
※②「独裁とは、排除の別名であり、それは「影響力の排除」のことです。労働者階級が権力を握ったら、資本家階級の影響を排除しようとするのは政治として当たり前で、だから今の日本の政治は資本家階級独裁と言えると考えています。」
※③立法権だけでなく行政権をふくめたすべての権力を労働者階級が掌握すること――これを比喩するため、立法権も行政権も掌握した共和政ローマの独裁官（ディクタトル）になぞらえ、「プロレタリアートのディクタトゥーラ（プロレタリア独裁)」とよんだ。マルクス主義の見解では、資本主義社会は、形式上は三権分立していても、ブルジョワジーが階級としてこの全権を握っているブルジョワ独裁であるとみなす（ブルジョワジーのディクタトゥーラ)。これに対置してプロレタリアートのディクタトゥーラを提唱した。プ

ロレタリアートの独裁は、社会の圧倒的多数を占めるプロレタリアートの、極めて少数であるブルジョワジーに対する独裁であるため、実態としては「ブルジョワ独裁」に他ならない「ブルジョワ民主主義」体制よりも、民主主義的であるとマルクスやその後継者たちは主張した。